

犬伏家住宅にみる近代性

はじめに 犬伏家住宅は、徳島県板野郡藍住町東中富に位置する。敷地内には、製薬工場および当主の屋敷等が複数棟配置される。いずれも昭和6年(1931)から昭和9年にかけて建てられた建造物群で、これら当時の建造物群が一体的に現在まで良好に残っている。2020年には国の重要文化財に指定された。

奈良文化財研究所では、2020年度に藍住町から保存活用計画策定の委託を受け、調査研究を進めた。調査では、建物履歴調査、家具什器調査、破損状況把握調査等をおこなった。本報告では、調査によってあきらかになった犬伏家住宅の特質について概観したい。

犬伏家住宅概要 犬伏家は、江戸時代より藍商農家として栄え、江戸後期からは製薬業を始めている。当地にいつから居を構えていたかは不明であるが、遅くとも享保年間にはこの地に建てられた前身の屋敷に居住していたとみられる。前身屋敷が建っていたにも関わらず、昭和6年から、現在の新宅の工事が着手された。敷地を若干北に拡張し、前身屋敷は全て撤去され新しい建築に建て替えられた。敷地内に現在残る建造物は、いずれも昭和6年から8年にかけて造られたもので、設計者は樽谷茂八、大工は森海三郎との記録が残る。以下、それら建造物26棟の規模、建築年を示す。①主屋：木造2階建、昭和7年上棟(棟札)、②浴室および内便所：木造平屋、昭和7年上棟(工事記録)、③離座敷：木造2階建、昭和7年上棟(工事記録)、④書斎：木造平屋、昭和7年上棟(棟札)、⑤宝庫：土蔵造2階建、昭和7年上棟(棟札)、⑥座敷：木造平屋、昭和8年上棟(棟札)、⑦応接室：木造平屋、昭和8年上棟(棟札)、⑧中門および両脇塀：木造、一間棟門、昭和8年頃、⑨機械工場：土蔵造2階建、昭和7年上棟(棟札)、⑩五番倉：土蔵造2階建、昭和7年上棟(棟札)、⑪北倉：土蔵造2階建、昭和7年上棟(棟札)、⑫乾倉：土蔵造2階建、昭和7年上棟(棟札)、⑬味噌倉：土蔵造、2階建、昭和8年上棟(棟札)、⑭東倉：土蔵造2階建、昭和8年上棟(棟札)、⑮表門：木造、長屋門、昭和8年上棟(棟札)、⑯巽倉：土蔵造2階建、昭和8年上棟(棟札)、⑰前納屋：木造2階建、昭和8年上棟(棟札)、

⑱東通用門：木造、一間棟門、昭和8年頃、⑲外便所：木造平屋、昭和8年上棟(工事記録)、⑳稻荷神社：木造、一間社流造、㉑北通用門および両脇塀：木造、一間棟門、昭和8年～9年頃、㉒油庫：土蔵造2階建、昭和9年上棟(工事記録)、㉓灰屋：木造大壁造平屋、昭和9年上棟(工事記録)、㉔東面北半部板塀：木造、昭和8年～9年頃、㉕西面土塀：木造大壁造、昭和8年頃、㉖西南隅部高塀：木造、昭和8年～9年頃。

いずれの棟も、木造伝統構法により造られ、意匠も伝統的なものを原則踏襲する。ただし、使われる仕上材や見え隠れとなる基礎部分、家具や照明器具等において、昭和初頭の時代を反映した意匠や技術が加味される。以下、犬伏家住宅にみえる近代性について確認したい。

犬伏家住宅にみる近代性 基礎は、原則コンクリート造の布基礎がめぐる。ただし、主屋や座敷の正面等の比較的目に付きやすい箇所については、コンクリート基礎の上に延石として青石が置かれ、意匠的に丁寧な配慮がなされていることがうかがえる。前納屋や北倉の庇の独立柱基礎では、コンクリート独立基礎の上に砂岩の基礎を置き、砂岩内部をアンカーボルトが貫通し、コンクリート基礎と柱が緊結される。これも意匠的に伝統的な見えを意識したための措置であろう。

仕上材については、タイルが多用されていることを指摘できる。炊事場、洗面場、浴室、便所において、床、壁、手洗い器等にタイルが使用される。炊事場の流しもレンガ積の表面にタイルが張られる。タイル裏面のトレードマークから、タイルは「日本タイル工業株式会社」製であることがわかる。こうした水廻りでの使用以外では、主屋の玄関土間は床全面にタイルが張られる。この点は他にあまり例をみず、独特な土間空間を造りだしている。

外部の仕上げでは、コンクリート洗い出しを使用して点が目される。主屋台所の外壁は腰高までコンクリートで壁を立ち上げ、表面を洗い出し仕上げとする。上部は押縁下見板張とするも、全体の意匠としては違和感なくまとめられる。洗い出しはその他、渡り廊下の腰壁や主屋前の板塀の下部等、雨掛りとなる箇所にも用いられる。

犬伏家住宅において唯一、伝統的な意匠から離れ、洋



図57 応接室 ラウンジチェア

風な意匠が多く盛り込まれた棟が応接室である。外内部とも和洋折衷の表現であるが、内部はより洋風の雰囲気の色濃い。床は板張り、腰壁は虎斑の入った檜板が張られ、その上部はクロスが貼られる。壁には長押がまわり、天井は格天井で造られるなど和風の意匠も盛り込まれるが、室全体の意匠はまとまりがある。室内には当初家具も良好に残る。肘掛けのラウンジチェアは3種類あり、いずれも布張りで青地に白でアカンサスの文様が描かれる。出窓には造り付けでソファが配されるが、この布地も同様の文様をもつ。家具の製作をどこが担ったか不明であるが、室内の意匠に合わせて家具を設計し、製作されたとみられる。照明器具も当初のものが残る。器具は、

図58 犬伏家住宅1階平面図（出典：参考文献1）

円や六角形等の幾何学を駆使して造られており、当時流行していたアールデコ風の雰囲気をもつ。

おわりに 犬伏家住宅は、昭和初頭に屋敷全体を新たに建て替えるも、それ以前の屋敷構えを踏襲することで、この地域に近世から続く藍商屋敷の姿を現在に伝える。いっぽうで、旧来の建物形式を踏襲しながらも昭和初頭という時代に合わせて意匠、技術両面において建物形式を新たに展開させた点で貴重である。 (前川 歩)

参考文献

- 1) 藍住町教育委員会『犬伏家住宅調査報告書』2019。